

# 鳩間島教材 解説

## 目次

- 1.鳩間島の棒術
- 2.鳩間島への道
- 3.星砂がかがやく海
- 4.島を守る人たち

## 1.鳩間島の棒術

下地治人

沖縄県内には、全域にわたって地域の棒術が多く存在する。その地域の棒術は、沖縄の空手古武道の護身術的要素の強い棒術とはイメージの異なるものである。多くは、豊年祭などの年中行事などで演武され、沖縄の年中行事と棒術は切っても切れない関係にあると考えられる。特に鳩間島で感じたことは、神への奉納芸能であるということである。護身術、また、自分を強くかっこよく表現するなどいった面よりも、神へ今年の豊作の感謝の意と来年のユガフ（世果報）を祈ることを最も大切にしたい芸能なのであると考える。そこにこと鳩間島の棒術、地域の棒術の意義があると考ええる。

本教材は、子どもたちの住む地域にある伝統芸能学習が大きな目標である。教材内容としては、伝統芸能の技能に中心をおいた学習ではなく、社会科教育の内容を中心に作成した教材内容を意識したつもりである。力不足な点も多々あるが、この教材を使って子どもたちに自分たちの地域の伝統芸能から地域社会の場面が見える、理解できるようになってほしいと考える。

まず、「1 豊年祭と棒術」においては、祭りとウタキの関係を子ども自らの調査によって学習してほしいと考えた。そのため、鳩間島の豊年祭の様子を追っていきながら、そこにウタキが登場してくることに気づくような流れになっている。調べ学習の際には、簡単なウタキの知識を本や資料などで調べたことを下地にしてから、地域のお年寄りへの聞き取り調査を行ってほしい。ウタキは、古くから伝わる地域信仰である。自分たちの地域だけではなく沖縄全域にも共通する点が多い。この学習を下地に、沖縄の古くから伝わるウタキ信仰への興味関心の芽生え、学習への一歩になると考える。

次に「2 棒術を奉納する」においては、ウタキの神と司の関係を子ども自らの調査によって学習してほしい。その中で、「司（ツカサ）」とはどのような存在なのかということを知ってほしい。やはり、ここでも調査の重要な人物はお年寄りである。子どもたちの世界と

お年寄りの世界の乖離を子どもたちも教師も感じてほしいと思う。同じ地域に生まれ育ちながらこのような乖離を感じることは、今や都市部の人びとだけではなく、いわゆる田舎の人びとでさえも同様なのではないかと考える。今の世界とむかしの世界をつないでくれるのはお年寄りだと考える。今ある地域の生活様式も文化もその上に成り立っていると考えると、お年寄りから多くのことを学ぶことを子どもたちに理解し、感じてほしい。

また、ここでは、子どもたちに棒術がただ豊年祭で演武されているのではないことを理解してほしい。鳩間島では、サンシキというウタキの神々があつまる場所で芸能をおこなう。棒術などの芸能は、その集まった神へ奉納するためにおこなうのである。このことは、祭りで芸能をおこなう古くからある本来の意義であると考え。地域の芸能が祭りとは深く関わっているという点だけではなく、地域にあるウタキの神とも関わっている点にも気づいてほしいと考える。また、奉納芸能には、神への感謝とユガフへの祈りがこめられて奉納されることも重要な点である。それは、個人的な願いよりも島、村などの地域としての願いである。その点についても子どもたちに気づいてもらいたい。

棒術の技能的な面についてのことは少ししかふれられていないことは、教材の目的上お許し願いたい。この点については、実際に各地域の棒術の指導者の方に体験的な学習を依頼して補ってほしい。

最後に「3 棒術を演武するために大切なこと」においては、これから地域の棒術、または、伝統芸能に参加する子どもたちの芸能活動への参加する姿勢について考えてほしいという思いに基づいて作成した。芸能はただ形通りに体を動かせばいいのではない。その動きの中に、精神的に大切なことが含まれることによってすばらしい芸能になるのであると考える。棒術のタイコマーは、周りの太鼓と自分の太鼓の音を合わせなければならない。相手を意識する、気遣う心配りが重要なことなのである。そこから共同体意識も芽生えてくるのだと考える。推測の域を超えないが、しかし、聞き取り調査では、同様の意見が聞かれた。実際に参加した者しかわからない共同体意識を感じるという。また、振り棒などの二人で打ち合う棒術も同様に、激しく迫力のある棒術を演武するためには、お互いの息が合わなければならない。お互いが相手を気遣い、意識することによって、怪我もなく、すばらしい棒術を演武できるのである。

以上、棒術をとおして、祭り、ウタキ、司などを理解しながら、同時に、人との結びつき方を考え、理解できる教材を開発、作成したつもりである。まだまだ、至らない点があるが、私が考える目標に子どもたちが学びながら近づいていくことを期待したい。

調査では、多大な迷惑をかけたにもかかわらず、鳩間島の人びとにお世話になり、まことに感謝して、言葉では言い表せないほどである。ありがとうございました。

## 2.鳩間島への道

与那嶺匠

### 竹富町における海上交通と、島々の関係性

竹富町の各島は、それぞれがお互いにつながりあっているということは殆どなく、主に石垣島を経由してつながりあっているというのが現状である。また島によっても、経済性という理由から便数が大きく違っている。ともすれば竹富町は、互いの島々の一体感や共同性が損なわれてしまうような環境にあるということを確認し、いかにしてそれが重大な問題であるかと町民一人一人が認識することが、今後の竹富町各島の関係性構築において重要なウェイトを占める。

### 鳩間島の商店について

鳩間島の商店は、いわゆる島民生活の支えというよりも、補足的な商品購入のための店である。商店の存在は島民だけでなく、観光客の存在も見据えたものであり、そのために観光客に対する商品も取り揃えている。

商品は石垣島から定期船に乗せて鳩間島まで送ってもらっており、冬場の船便が安定しない時期は、西表島の大原港に商品を卸してもらい、そこまで店主が商品を取りに行くということもしている。

商品には輸送コストがかかってしまうために、本来ならばそれが売値に反映されるのだが、無理な売値の設定によって利用しづらい商店にならぬよう、店主があえて輸送コストを売値に極力反映させないようにしている。そのために必ずしも店主は商業行為によって利益を得ているとは言いがたい。しかし鳩間島の商店は、島民の福利厚生的な利益と観光客に対するサービスを主要設置目的としているため、店主はそれを理解して、自己の生活が破綻しない範囲で、商品の価格上昇を抑えている。

鳩間島島民は主な食品は、個人で石垣島の業者から仕入れている人が多いため、商店では殆ど買い物はしない。そのために商店は仕入れた商品が何時売れるのか分からないため、日持ちのしない商品は扱うことが難しい。ある程度日持ちのする根菜などを仕入れるときもあるが、たいていの場合は島民からの注文を受けてから、野菜や肉等の商品は仕入れるようにしている。

### 教材の主題

竹富町における商業活動は、他地域と異なる部分が存在する。沖縄本島並びに日本国における大多数の住民は、その生活物資の購入を地域の商店に大きく依存している。商店もまた一部の観光客向けの商店を除き、地域住民の商品購入による収入により成り立っている。

しかし竹富町は、このような強い住民と商店との依存関係とは異なる形態を示している。

商店は竹富町住民の要求に対し、僻地という状況から、必ずしも完全に応えることができない。そのために竹富町住民は、その生活物資の購入を必ずしも地域の商店だけに依存することができないという状態である。

このような現状を理解し、そして竹富町における住民と商店の特別な関係性を学習し、竹富町独特の商圈並びに商業の現状を、教材を通して理解できるようにする。

### 3.星砂かがやく海

与那嶺匠

#### 星砂と竹富町

星砂は竹富町において重要な観光資源である。観光客の集客や地域のイメージ戦略において、独特の個性を秘めたアピール材料であり、その有用性は高い。竹富町の地域振興における物的資源としての星砂の価値を認識し、その健全な活用方法を見出し、認識することは、竹富町という地域においては重要なことである。

#### 星砂から見る環境問題

星砂は自然界に存在する有孔虫の死骸である。星砂を販売目的で採取する場合、すでに死骸となった有孔虫を採取するのではなく、実際はいまだ生命活動を営んでいる状態で有孔虫を採取し、それを日干しにして星砂を作る。そのため、有孔虫の乱獲が行われ、現在は有孔虫の生体数並びに星砂の量が激減している。

また採取される生きた有孔虫は、主に海の浅い場所の岩場の海草などに付着して生息しているため、有孔虫の採取時にはその海草ごと採取する。このことが海草や藻自体の生体数も減少させ、これらの海草や藻を主食としている魚類も減少してきている。

生きた有孔虫の採取は、竹富町近海の生態系と食物連鎖を崩壊させてしまうという危険性を秘めている。そのために竹富町各地では、星砂の採取の自粛を求めている地域が多い。地域ぐるみで星砂の利用を見直し、その価値を再認識することで、住民が一丸となってその保護に努めている。

#### 教材の主題

竹富町の重要な観光資源である星砂の生態を理解し、その適正な利用方法と、環境問題という視点から、星砂の保護への意識を持たせる。

## 4.島を守る人たち

与那嶺匠

### 鳩間島の人口構成

鳩間島の人口は、鳩間島生の島民、里子、学校職員の3種類で構成されている。厳密な意味（これから先も鳩間島で暮らしていくであろう人）の人口は減少傾向であり、またその年齢層も高齢化をしている。

鳩間島の人口は、学校を卒業した時点で島を出て行く里子たちと、転勤で訪れる学校職員の流動的な人々により支えられている部分があり、里子や学校職員がいなければ、島の運営に支障をきたす状況になってきている。

### 里子の受け入れと鳩間小中学校

鳩間島には昔、診療所と鳩間郵便局があったが、沖縄県の日本復帰後に合理化の名の下に廃止された。現在ある鳩間島の郵便局は、鳩間島島民が設置している特定郵便局である。そのため、行政の影響下にある公的機関は鳩間小中学校のみである。

島民は鳩間小中学校を行政と鳩間島を結ぶライフラインとして考えており、また学校が島に存続している限りは、鳩間島にもまだ若い人間が住み着く可能性があると考えている。

このために、子供のいなくなった鳩間島に学校を存続させ続けるため、鳩間島の島民は里子を受け入れるという選択をした。初めは親類の子供や孤児院などの子供を里子として迎え入れていたが、そのうちに、ひきこもり等で普通の学校生活が送れない子供が、里子として鳩間島を訪れるようになった。

しかし里子たちは学校を卒業してしまうと、出身地に帰って行ってしまうために、恒常的に里子を受け入れなければならないが、また里親の島民も高齢化しているために、里子の受け入れは短期的な現状維持としてしか機能していない。

### 鳩間島の衰退と、発展への努力

鳩間島は島民の高齢化、若者不足、地理的なものによる不便さ、明確な振興プロジェクトの欠落など、典型的な過疎化の形態を示している。竹富町では過去に廃村となった場所があるが、鳩間島はまさに竹富町で最も廃村へと向かっていると見えるような場所といえる。この現在進行形で廃村への道を歩んでいる鳩間島を見つめ、考察することで、鳩間島ひいては竹富町の歩むべき道とその対策に関心をもてるようになることが重要である。

### 教材の主題

現在の日本において高齢化問題と少子化問題は、将来の国のあり方において重要な部分を占めている。しかしながら竹富町などの僻地においてこの問題は、現在進行形の形で取

り組まなければならない重要な問題となっている。

竹富町の中でもより一層の過疎化、廃村の危機に瀕している鳩間島の取り組みと、その取り組みを支える住民や子供たち、行政の姿を見つめるところで、今後の竹富町における過疎化、高齢化、少子化への取り組みの方向性と問題性を意識し、個々が郷土のためにできることを思考し発展させることができるようにする。また、来るべき全国的な少子高齢化社会の利点と問題点の認識への動機付けとして利用できればよい。